

*Winesburg, Ohio*における グロテスクな人々とその真理

播磨谷 一 雄

The Grotesque and Their Truths in *Winesburg, Ohio*

Ichio Harimaya

(昭和59年10月28日受理)

The present paper is an attempt to reconsider Howe's and Cowley's opinions on Anderson's view stated in "The Book of the Grotesque."

In order to explain the reason why the people became grotesque, Howe attaches much importance to the external forces to the people, and Cowley to the fact that they cannot express themselves and lack the ability to communicate with others. Both of their comments are very helpful to understand the reason, but they don't cover all the stories in this work, because there are twenty-five stories there. So it seems necessary that we should reconsider the reason and the relation between the grotesque and their truths.

According to Anderson, there are many kinds of truths and each of the grotesque has its own truth. It is very important to analyze what kinds of truths the grotesque have, because how they live in the society depends on the truths and their attitude to them. When they cannot live by their truths, they isolate themselves from the society. Though they sometimes try to break the walls of isolation, they often fail in the attempt and become more isolated than before as the result. But they persist in their truths and would never give them up. We can find fanaticism in their attachment to the truths.

Anderson describes the external grotesqueness of the people, but he believes that they have warm humanity behind the grotesqueness. What he wanted to emphasize in this work was the beauty of the grotesque and his sympathy for them.

1

Winesburg, Ohio の25の短篇の中で、*The Book of the Grotesque* はその冒頭に位置し、後に続く物語の序文的な位置にある。これを序文と考えるか物語の一つとするかについては、多くの批評家は序文としての位置づけを行っている。その理由は作者がその中で後に続く24の物語の中心的理念となるグロテスクな人物像について、哲学的な理論づけを行っているように思われるからである。作者は老作家として登場し、真理、グロテスク、虚偽についての考えを述べ、その考えは後に続く物語の中で具体的に示されることになる。またこれらの物語の背景として同じ *Winesburg* という町の様々な人物を登場させ、その中心に George Willard という若い新聞記者をすえることにより、いわば一つの長篇小説としての

統一をはかるという意図があり、そのためにも冒頭にこの作品の中心的理念を述べる章を置くことは意義深かったに違いない。

William L. Phillips は現在残されている原稿からこれらの作品の制作順序について考察を行っているが、⁽¹⁾ それによると最初に完成したのが *The Book of the Grotesque* であり、1916年の2月に *Masses* という雑誌に最初に発表されている。次に *Hands, Paper Pills* という順序になっているが、*The Book of the Grotesque* が最初に完成した点に注意すべきである。即ち Anderson は初めにこの作品の中で中心的な理念を述べ、それ以降の物語をこの理念に基づいて構築していったように思われる。この作品の中心人物である George Willard を25篇中15篇に登場させ、最後を彼の「出発」で終わるなどの構成上の工夫がなされ、全てにこの理念が十分に見られる

Winesburg, Ohioにおけるグロテスクな人々とその真理

わけではないが、物語に登場するほとんどの人物がなんらかの意味でグロテスクであり、*The Book of the Grotesque* に述べられている真理、グロテスク、虚偽の理念が *Winesburg, Ohio* の中心的主題であることは否定できない。次にその部分を引用し、批評家の論評を検討する。

It was the truths that made the people grotesques. The old man had quite an elaborate theory concerning the matter. It was his notion that the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a falsehood. (2)

ここに展開されているグロテスク論について、多くの批評家が意見を述べているが、その代表的なものとして Irving Howe と Malcolm Cowley の批評がある。まず Howe はこの個所はグロテスクな人々とは彼らを醜くする真理を求めた人々であるという作者の意義深い考えを述べた部分であるとして重視しているが⁽³⁾、次の引用のように、この個所と後に続く物語の示す意味とは不調和な部分があるとしている。

The one conspicuous disharmony in the book is that the introductory "Book of the Grotesque" suggests that the grotesques are victims of their wilful fanaticism, while in the stories themselves grotesqueness is the result of an essentially valid resistance to forces external to its victims. (4)

彼が不調和な部分として主張するのは、ここで述べられているように人々をグロテスクにした原因についてである。彼によれば、その原因はグロテスクな人々の狂信的行為によると作者は述べているが、実際の物語では彼らに対する外的圧力への抵抗の結果だというのである。一方、この点に関して Cowley は次のように批評している。

George Willard is growing up in a friendly town full of solitary persons; the author calls them "grotesques." Their lives have been distorted not, as Anderson tells us in his prologue, by their each having seized upon a single truth, but rather by their inability to express themselves. Since they cannot truly communicate with others, they have all become emotional cripples. (5)

両者の批評に共通しているのは、ともにグロテスクな人間の真理に対する熱狂的態度がそのグロテスクさ、あるいは彼らの歪曲した精神の原因ではない

としていることである。Anderson は引用(2)の文で「人間が真理を自分の物とし、それで生きようとするとその人はグロテスクになる。」と述べているが、両者はこの点を否定しているのである。Howe はその原因として、人間を圧迫する外的圧力、即ち社会環境などの個人を取り囲む環境からの圧力を指摘しているのに対し、Cowley は個人から外的世界、即ち他の人間や社会との意志疎通の能力がグロテスクな人間に欠けていることを強調している。

作者の意図とこれら両者の批評を考慮しながら、*Hands* における Wing Biddlebaum の場合を検討する。Wing にとっての真理は彼が20年前に小学校の教師であった時の生徒に対する指導法にある。彼の指導法は生徒の肩をなでたり髪に触れたりして、彼らを手で愛撫することにより彼の愛情を伝え生徒の不安を取り去ることである。彼がこの方法で教えることができた時は、彼は優しい力強さにあふれた教師だった。しかし、ある知恵遅れの生徒の言葉が原因となり、この方法が父兄に同性愛の疑惑を抱かせた時、それまで漠然とした不安を感じていた父兄の疑惑は一気に深まり、彼はいわばピューリタン社会の異端者として親たちのリンチを受け町から追放される。彼は20年後の現在、Winesburg で名前を変えて生活しているが、絶えず恐怖と不安におびえている。

この作品を Howe の批評の観点から考えると、外的圧力がグロテスクな人間を作る原因であるという点では一致しているようにみえる。外的圧力とは Wing を同性愛者として告発する父親たちの姿であり、彼らの中に19世紀末のアメリカのピューリタン社会を想像することができる。Wing は外的圧力により、彼の真理を貫いて生きることができずグロテスクな人間になっていると言える。一方、Cowley の批評の観点で考えると、Wing は意志疎通の手段として愛撫するための手を持つが、その愛情を表現するための手の使用が社会により禁止されているために、Cowley の言うように自己を表現する手段を持たない状況におかれていると言える。従って彼の批評もこの点では妥当性がある。

両者の批評はそれぞれの真理によって生きようとする人がグロテスクに変化する原因について互いに異なる側面からの批評であり、それぞれ妥当性が認められるが、*Winesburg, Ohio* には25の物語があるのでそのいずれにも完全に当てはまるとは言い難いように思われる。Howe の言う外的圧力は *Hands* においては比較的明瞭であるが、他の物語では他人からの圧力という形をとりそれ程直接的ではなく、町

の人の噂や溶け込んでいけない仲間や友達という形で存在しているに過ぎない。勿論、これらの全ての物語の基本的背景として、農業主義社会あるいは手工業社会から産業主義社会への移行という時代の波が、Winesburg というこの田舎町の人々に次第に押し寄せつつあることは感じられるが、まだそれ程直接的な影響とはなっていない。また Cowley の言う伝達能力の不足については、そのために孤独を打破できない主人公がかなり多く認められ、確かにグロテスクな人々の特徴となっているので、*Hands* の場合のみならず他の物語の場合にもかなりの妥当性があると言える。しかし、逆に伝達能力が過剰な場合として *A Man of Ideas* の Joe Welling の例などもあり、主人公の全員がその能力の不足に悩んでいるわけではない。孤独で悩む人々の場合でも、特に愛情が問題となる場合は意志を伝達するだけでは解決にならない場合が多いのである。人々の意志伝達以前の複雑な精神状況が問題とされなければならない。

Anderson は *The Book of the Grotesque* において、老作家の本には数百の真理があったとして、その例として virginity, passion, wealth, poverty などの多くの真理を挙げ、真理は非常に多くの不確定な思想の集合体であったとしている⁽⁶⁾。これは人が明確な思想を持ちそれによって生きようとする時、その思想がどんな思想でもその人にとって真理になり得ることを意味する。彼によれば人がその真理により生きようとする時、人はその真理のためグロテスクになる。人はどんな真理を選んでも、その真理で生きようとする時、必然的に片寄せざるを得ないしグロテスクにならざるを得ないのである。さらに注意すべき点は、その真理が虚偽になると述べている点である。それは人は生きるために選んだ真理に裏切られるという意味である。この点について Lionel Trilling は次のように述べている。

In what way could it have become a falsehood and its possessor a "grotesque"? The nature of the falsehood seems to lie in this—that Anderson's affirmation of life by love, passion, and freedom had, paradoxically enough, the effect of quite negating life, making it gray, empty, and devoid of meaning. (7)

彼は Anderson の言う真理を愛、情熱、自由と要約して考えているが⁽⁸⁾、それらの人生の肯定的な要素が全く意味のない否定的なものに変わると述べている。このように真理が虚偽に変わると Trilling は肯定から否定というように把握している。*Hands*

の Wing の場合でこれを考えると、彼が真理として選んだ指導の方法は彼に生きがいを与え、生徒にも効果のある彼の生活に非常に肯定的な方法であったが、社会により糾弾され彼の人間性が全く否定されることにより、肯定から否定への変化が認められるのである。Trilling のこの点における指摘は全く妥当性があるように思われる。

真理が虚偽になり人をグロテスクにする原因として、前述のように Howe は外的圧力を、Cowley は伝達能力の不足を上げ一応の妥当性は認められたが、その他に Anderson が主張するように人々の真理に対する熱狂的態度も一つの大きな要因と考えられる。以下においては、人々がどのような真理を持ちそれがどのようにして彼らをグロテスクにし虚偽になったかその過程を考察し原因を探りたい。また、作者の目はこの変化と同様にその結果である孤独の現象に注がれているように思われる。グロテスクな人々は社会から孤立した孤独な人々であり、彼らの孤独がどのように描写されているかについても考察したい。

2

Trilling の真理の要約に従い、それが愛または情熱の場合から考察する。その例として *Mother* や *Death* の Elizabeth や *Surrender* の Louise の場合が上げられる。Elizabeth と Louise は幼児の時に母を失ない、愛情の薄い父に育てられたために愛情に飢えているという点では一致している。Elizabeth は若い頃は女優熱に浮かされ、ロマンチックな愛を追い真の恋人を探し求めるために男性遍歴を重ねた奔放な娘であった。結婚後、彼女は望んでいたのは夫の Tom ではなく結婚そのものであったことに気づき、結婚について誤解していたことを悟る。Louise も Elizabeth と同様に愛情を望みながら獲得できない女性である。作者はこの物語の最初に誤解の物語と述べているように、彼女と夫との間には埋めようのない誤解がある。彼女が Hardy 家に下宿した時、John に出した "I want someone to love me and I want to love someone."⁽⁹⁾ で始まる手紙は、彼女の意図に反して John には彼女が彼を愛人として受け入れるという意味に誤解された。彼女が望んでいたのは John という特定の愛人ではなく互いに理解し合える相手であった。結婚後、彼女は夫の John にそれを理解させようとするが、彼は男女間の愛については自己流の考えを持っていて彼女の考えを聞こうと

もしなかった。

ElizabethとLouiseは愛情により互いに意志の疎通をはかり理解し合う方法を求め、それが彼らの真理であるが、彼らの求めるものが夫に理解されず不本意な生活を強いられ、そのことから生活に歪みが生じ彼らはともにグロテスクな存在となる。彼らは情欲的な愛ではなく、互いに理解し合う人道的な愛を求めているが、現代社会ではそれが情欲と結びついた愛と誤解され、彼らはその被害者となる。彼らがそのような愛を真理としたことが、彼らを虚偽に導きグロテスクな存在とするのである。

次に引用(9)の「誰かに愛されたく、愛したい」人々の例として*The Teacher*のKate Swiftの場合について考察する。彼女は30才の独身の教師であり、激しい精神の持ち主であるが、町の人々は次のように彼女を考えている。

The people of the town thought of her as a confirmed old maid and because she spoke sharply and went her own way thought her lacking in all the human feeling that did so much to make and mar their own lives. (10)

しかし、彼女の中には男性に愛されたいという激しい欲求があり、また教え子たちに対する教育の情熱も持って町の人々の考えと異なっている。教え子のGeorgeに対して人生の意義と解釈を学ばせてやりたいと彼に忠告を与えた時、彼女の激しい欲求が男性としてのGeorgeを彼女に強く意識させ、彼女が彼に教えようとしていることを伝えることができなくなり、またGeorgeにも女性としてのKateを意識させ彼を混乱させるのである。

Kateの真理は愛と情熱であるが、それらを真理とする女性がほとんど全て彼らを理解してくれる愛情の対象を持たないように彼女にも対象はない。教育上の情熱の対象としてのGeorgeにも十分に彼女の意図することを伝えることができず、彼女はそのような自分に悲しみ、神に祈るだけである。このようにして彼女の真理とする愛と情熱は不毛のものとなり虚偽に変わるように思われる。この場合に、引用(9)で述べられた町の人々の彼女についての評価が一種の外的圧力として作用していることを認めなければならない。このような小さな町では人々の噂が個人を孤立させる可能性が十分にあるからである。以上の三人の女性は彼らの意志がそれぞれの相手に十分に伝達できずに終わり、Louise, Kateの場合には誤解されるとも言える。その理由として伝達能力の不足は確かに上げられるが、それと同様に彼らとそれ

ぞれの相手との考え方や意識の相違も重要な原因の一つとして考えられるのである。

次に*The Strength of God*におけるCurtis Hartmanの場合を考察する。彼はまじめで小心な牧師であるが、Kateをのぞき見する機会を偶然に得、理性を失なう程それに夢中になる。彼は神へのお祈りによりその誘惑から逃れようとするが不可能である。牧師の精神状態を支配しているのは情欲であり、牧師としての理性とのぞき見により刺激された本能的欲望との間で葛藤が始まる。ついに彼の理性がその欲望に抑えられ、彼は欲望のままに積極的にのぞき見しようと決意して待つ時、Kateがベッドのそばでお祈りを始める。この祈りの姿は彼には神のお告げのように感じられ、彼女は欲望の対象ではなく「神様の使女」⁽¹¹⁾に変わり、彼は窓ガラスを破る勇氣を得るのである。ガラスを破ることはそれを全部入れかえることになり、のぞき見をする穴を全面的にふさぐことを意味する。

彼の真理は情欲的な愛への執着であり、彼が神に仕えるまじめな牧師であるがために、のぞき見に熱狂的に執着する姿はグロテスクな姿となってせまってくる。このようなのぞき見の行為を続けた場合には、彼の真理は虚偽に変わり彼の牧師としての職を奪うものになると思われる。彼は伝達能力は不足していないが、牧師という職業からくる精神的圧迫は認めなければならない。のぞき見というグロテスクな行為は、本能的欲望の抑圧の結果であることを作者は暗示しているように思われる。

真理が愛であるもう一つの例として*Respectability*のWash Williamsの場合がある。彼は若い頃、妻に裏切られた経験から、女性に対して極度の憎悪を持つ。彼は女性についてGeorgeに次のように語る。

“... I tell you, all women are dead, my mother, your mother, that tall dark woman who works in the millinery store and with whom I saw you walking about yesterday—all of them, they are all dead. I tell you there is something rotten about them. ... They are sent to prevent men making the world worth while. ...” (12)

このような女性に対する彼の偏見は、彼の妻の母が、不倫な行為をしたために帰された妻を彼の所へ戻そうとして仕組んだ行為が、彼の品位をひどく傷つけたことから生まれたものである。彼は妻を愛し、彼らの愛をこの上なく大切なものに考えていたので、それが妻の母の策略で侮辱され深く傷つくのである。彼は許そうと思って訪れた妻の家で、その母になく

りかかることになる。

彼の真理は愛であるが、それが達成されないことに対する強い怒りが女性に対する憎悪となる。その憎悪が彼の肉体や精神をグロテスクに変えてしまうと同時に、彼の純粋な愛の感情を虚偽に変えるのである。憎悪を生じさせたのは妻の不倫の行為やその母の品位を傷つける行為であり、Washにとってこれらは外的圧力として作用していると言える。

以上、考察してきたように愛や情熱を真理としている主人公に共通しているのは「誰かに愛されたく愛したい」という感情である。その感情は時には情欲により支配されることがあるが、愛情により互いに理解し尊敬しあう境地を求めていることは確かである。*Sophistication*のGeorgeとHelenが最後に達した境地がそれに近いように思われる。

For some reason they could not have explained they had both got from their silent evening together the thing needed. Man or boy, woman or girl, they had for a moment taken hold of the thing that makes the mature life of men and women in the modern world possible. (13)

それは現代社会の機構の中における互いの孤独感の確認から始まり、互いに尊敬の念を持った大人としての愛の理解に達することにより得られたものであった。彼らが理解したと思われる現代社会における愛は、愛を真理とするグロテスクな人々が求める理想でもあるが、彼らの真理に対するあまりに純粋すぎる態度故に得ることのできないものである。

3

次に人々の真理が愛と情熱以外の種類で、結果として特に厳しい孤独に関連しているものについて検討する。

*Paper Pills*のReefy医師は窓の開かない診察室に閉じ込められ、思想を紙に書きとめることにより真理の小さなピラミッドを作り上げては壊すという作業をくり返して暮している老人である。彼の思想は真理を形成し巨大に成長するが、発表されることなく紙玉に丸められて捨てられる運命にあり真理として取り上げられることはない。このように実現することのない不毛の思想をくり返し考え続ける行為が彼の真理であると考えられる。彼が一室に閉じ込められそのような行為を続ける限り、彼は社会から孤立し彼の真理が彼をグロテスクにする。彼の思想が語られたのは妻に対してだけであり、唯一の友人の

植木屋には紙玉を投げつけたただけであった。また思考が行われる場所は他者との接触のない密室のような部屋であり、それにより作者は他人あるいは社会と断絶した孤独な状態を暗示しているように思われる。

Reefyのこのように孤立した状態は外的圧力によるものとは思われない。外的圧力として考えられることは、彼のグロテスクな風采に似合わない美しい娘との結婚に対する町の人々の奇異な感情にわずかに現れているに過ぎない。また、彼が一人の友人しかいないことや、考え出された全ての思想が世に発表されず紙に書きとめられていることから言えるように、彼は十分な伝達能力を持っていたと言い難い。しかし、この場合注意すべきであるのは伝達能力の有無ではなく、彼の伝達の意志の有無であるように思われる。この物語で強調されているのは、閉じられた部屋で一心に思索する孤独な老人の熱狂的な行為である。彼は思考する行為そのものを心から愛しているものであり、その結果を他人に伝えるかどうかは別問題なのである。従って彼をグロテスクにしているのは外的圧力や伝達能力の不足ではなく、彼の真理に対する熱狂的態度であるように思われる。その行為は彼を社会から孤立させ、しかもそれらの思想が世に発表されることもなくただ紙屑として捨てられる運命にある時、それは不毛の行為になり行為そのものを否定する。その意味でReefyの真理もWingの場合と同様に虚偽になると言える。

Andersonが*The Book of the Grotesque*で述べている真理からグロテスクまたは真理から虚偽の変化は、*Hands*や*Paper Pills*の場合のみならずこの作品の他の多くの物語に見られる特徴である。それらの物語の中にはこれらの変化の結果として、社会との断絶及び深い孤独感が存在する場合がある。その状態に伝達能力が欠けた場合には、彼らの孤独がさらに深まり病的な状態にさえなる。その例を*Loneliness*のEnockの場合に見ることができる。彼は自分の考えを述べることのできない苦しみを次のように表現する。

Enock wanted to talk too but he didn't know how. He was too excited to talk coherently. When he tried he sputtered and stammered and his voice sounded strange and squeaky to him. That made him stop talking. He knew what he wanted to say, but he knew also that he could never by any possibility say it. (14)

彼は結局何も言えなくなり、絵の仲間を招くのをや

め部屋に鍵をかけるようになる。彼は部屋の中で現実の人間ではなく、彼の自由になる空想上の人物たちを創造する。彼は部屋の中では、空想上の人物を思い通りに動かすことのできる王様であり幸福である。その状態は彼のアパートに現実の一人の女が訪れることにより崩壊し、彼は空想の世界を失ない深い孤独に落ち込む。それ以後、他人は彼の幸福の秩序を乱し恐怖を与えるものになる。現実から逃避して全く自己中心的に自分の思い通りになる空想の中に生きるというのが Enock の真理である。しかし、この真理は彼を取り囲む現実の社会とはかけ離れた存在であり、彼は社会の一員として健全な人間関係を形成することができない。その意味で彼の真理もまた虚偽に変わるのである。

Wing や Reefy, Enock などのグロテスクな人物たちに共通なのは、彼らが他人から理解されずまた有力な伝達能力を持たないために社会から孤立し、孤独の壁の中に逃がれることである。相手に自己の意志を伝えることのできない彼らのもどかしさやいらだちが、乱暴な行為となって現れる場合がある。“Queer”の Elmer は誰かと話したくてたまらないが、うす馬鹿の老人と話すことしかできない。彼は George に彼が変人でないことを理解させるために殴ってしまい、逆にその変人ぶりを露呈する。Surrender の Louise の場合は、夫に彼女の考えを理解させられず、町の中を馬車を猛スピードで走らせるなどの乱暴な行動をとることのできない彼らとまぎらわせ、町の人から恐れられることによってさらに孤立化することになる。

そのようなもどかしさやいらだちは、視点を変えると彼らが孤独の壁を突き破ろうとした試みの失敗例でもある。彼らはその複雑な精神状態のために試みを暴力という形にしか表現できなかったのである。作者はそういう主人公たちの孤独の壁からの脱出の試みを冒険と呼んでいる。Adventure の主人公 Alice の場合がこれに相当する。

彼女は27才であるが、16才の頃の恋人 Ned との約束を信じて彼の帰りを待っている。彼が帰らないということが明確になっても、強い倫理感のために Ned 以外の男性との交際を自らに許すことができない。しかし、一方に男性に愛されたいという本能的欲求があって、倫理感とせめ合うことになる。ついにある雨の夜、裸で外へ飛び出し通行人に話しかけるといふ気遣いのような行動をとる。

Without stopping to think of what she intended to do, she ran downstairs through the dark house

and out into the rain. ... She thought that the rain would have some creative and wonderful effect on her body. Not for years had she felt so full of youth and courage. She wanted to leap and run, to cry out, to find some other lonely human and embrace him. (15)

dark house は彼女を閉じ込めておく孤独の壁を象徴的に示し、そこから逃がれ裸という自然の姿で雨に打たれること、即ち自然との接触により失なわれた人間性を回復し、他の孤独な人と交わりたいという作者の意図を反映するが、彼女の話しかけた通行人は耳の遠い老人であり、また裸の姿は現代の社会では許されない姿であり、彼女の孤独の壁を破る試みは失敗に終わるのである。そして彼女は、「多くの人はひとりで生き、ひとりで死ななければならないという事実」¹⁶⁾に直面しなければならないのである。

孤独な人々の孤独からの脱出のもう一つの試みとして都会への脱出志向がある。この志向を示す者は Mother の Elizabeth Willard, The Thinker の Seth Richmond, “Queer”の Elmer Cowley, Departure の George Willard である。若い頃の Elizabeth にとって都会とは彼女の舞台への憧れを満してくれる華やかな所であり、Seth にとっては、彼が住んでいながらその一員となることのできない町から逃れて仕事を得ることができる所である。また、Elmer は町における彼のみじめな状態を終わらせるために次のように考える。

“I will get out of here, run away from home,” he told himself. ... He would steal a ride on the local and when he got to Cleveland would lose himself in the crowds there. He would get work in some shop and become friends with the other workmen and would be indistinguishable. Then he could talk and laugh. He would no longer be queer and would make friends. Life would begin to have warmth and meaning for him as it had for others. (17)

また、George にとっては、父親の「抜け目のない人間になれ」「財布に気をつけろ、ぼやぼやするな」という忠告にもかかわらず、都会はそこでの生活の不安というよりは夢や希望を抱かせるものである。孤独な人々にとって、都会は退屈で偏狭な性格の人々の住む田舎町からの脱出の目標になる。彼らにとって都会はより自由に意志の伝達ができる希望の土地であり、特に George にとっては成功の夢をかなえてくれる所であるように思われる。彼らは都会の生活に暖かさを期待しているようにみえるが、田舎

町以上に深い孤独が待っていることを知らないのである。

4

Anderson の *The Book of the Grotesque* における、真理がグロテスクに変わり、さらに虚偽になるという論を物語の中の主人公の真理の種類に応じて考察してきたが、ほとんどこの理論に従って物語が構築されていることがわかった。しかし、少数の物語は真理が虚偽になるという点では該当しないことは認めなければならない。即ち主人公の持つ真理がその人をグロテスクに変えても、それがその人自身を否定する虚偽とならずにそのまま個人的にも社会的にも存在する場合である。*Godliness* の Bentley や *A Man of Ideas* の Joe Welling などにその例を見ることができる。

Bentley は旧約聖書の世界に生きる狂信的な信者であり、彼の真理は宗教であるが、大農場を営む事業家でもある。彼は孫の David と生け贄の儀式を行い、神の声を聞こうとするが、David は恐怖のあまり彼を倒して出奔し、二度と町に帰ってくることはない。Bentley は後継者を失うが、彼の神への信仰は衰えず精神的基盤を失うことはない。また Joe Welling の場合は、彼の真理は言葉であり、発作的に迸り出る言葉により相手を圧倒することである。その熱狂的弁舌により彼はグロテスクになるが、その真理のために彼の精神的及び社会的基盤が失われることはない。言葉により野球の試合に勝ち、ごろつき一家の娘を結婚相手とすることに成功する。彼の場合はその真理が否定的でなく、逆に肯定的に作用している。この場合には Cowley の伝達能力の不足の批評は全く該当しないのである。

Howe のグロテスクの原因として外的圧力を重視する批評は、前述のように全ての物語の背景として間接的に関係があるものの、直接的影響を持つ場合が少ない。また、Cowley の場合においても伝達能力の不足だけがグロテスクの原因ではなく、問題は伝達する以前の複雑な主人公の精神状況であるように思われる。従って彼らの批評だけではこの作品の全ての物語における人々のグロテスク化の原因を考察することができないように思われる。ここで考慮しなければならないのは、彼らがグロテスクの原因ではないと否定した主人公たちの真理に対する熱狂的態度である。彼らの全てはその真理に執着し態度を改めようとしな。社会的制裁を受けた Wing の

場合は別として、他は生涯その態度を変えることもなく孤独な状態におかれるのである。彼らは真理に対する熱狂的態度を捨てられないが故に、グロテスクになり孤独になるとも言え、それは作者が主張する点でもある。従って Howe や Cowley の指摘する原因の他に、熱狂的態度もその原因として加えるべきであろう。

Trilling は真理の種類として愛、情熱、自由を挙げているが、2において愛と情熱だけを取り上げ考察した。その他の種類として思考や宗教などが考えられるが、彼の言うもう一つの自由という項目では要約できないように思われる。グロテスクな人々の持つ真理のうちで最も多いのは愛と情熱であり、彼らは愛することと愛されることを望んでいるが、ともに愛の対象を決して得ることはなく、欲求不満であり孤独な状態におかれる。その爆発として起るのが暴力であり気違いのような発作的行為なのである。

Anderson はグロテスクな人物を描写する際に、その精神的または行動上のグロテスクさを描くと同様に、身体や服装のグロテスクの描写にも注意しているようにみえる。例えば、Reefy 医師については手の指の関節の異常な大きさや10年間着古した服について述べられ、⁽¹⁸⁾ *The Philosopher* の Parcival 医師の場合はたばこで汚れた黒い歯や奇妙な左眼のまぶたの動きまた汚れた白いチョッキなどについて述べられている。このように様々なグロテスクな人々の描写の中で Wash William についての描写が最も長く詳細である。それはまず公園の中のグロテスクな猿の描写に始まり、それに対する人々の反応を述べ、それから視点を Ohio 州 Winesburg の Wash に移すというやり方で最後に次のような描写をしている。

Wash Williams, the telegraph operator of Winesburg, was the ugliest thing in town. His girth was immense, his neck thin, his legs feeble. He was dirty. Everything about him was unclean. Even the whites of his eyes looked soiled. ⁽¹⁹⁾

Wash の醜悪さの強調された描写は、「醜悪さの極致においては一種のひねくれた美に達する」⁽²⁰⁾ という作者の意識を反映する。かって州で最高の電話技師で感じの良い青年だった Wash が、妻とその母に裏切られ、女性についての憎悪に凝り固まり、今は全くグロテスクな姿になって George にその怒りを打ち明ける時、George は次のように感ずる。

In the darkness the young reporter found himself imagining that he sat on the railroad ties beside

Winesburg, Ohioにおけるグロテスクな人々とその真理

a comely young man with black hair and black shining eyes. There was something almost beautiful in the voice of Wash Williams, the hideous, telling his story of hate. (21)

このように最も醜悪な外見をしている Wash に美を認めるといふ作者の意識は、この作品のグロテスクな人々の全てに対して作者が抱いている感情である。作者は彼らの精神的、肉体的なグロテスクさをその物語の中で詳細に述べる場合が多い。しかし、Wash の例でわかるように醜悪な外見が述べられる反面で彼らの内面の人間性の純粹さや暖かさが強調される。例えば、*Paper Pills* の Reefy 医師と後に彼の妻になった娘との結婚の話は、「その味わいの深さはワインズバーグの果樹園に実るひねこびたりんごの味に似ている」⁽²²⁾として、グロテスクな Reefy の娘に対する暖い思いやりが描かれている。Reefy の人間性の暖かさを、皆に見捨てられたひねこびたりんごが意外な甘さを持っていることにたとえているのである。

Anderson が *Winesburg, Ohio* で述べているのは、グロテスクな人々の外見の醜悪さの陰に隠れた人間性の美しさである。彼らは真理に執着することによりグロテスクにならざるを得ないが、その社会的地位を犠牲にしても真理に対する夢を捨てようとしなない。その点に Anderson はどんな時代でも失われることのない人間性の大きな価値を認めているのである。

注

- (1) William L. Phillips, "How Sherwood Anderson Wrote Winesburg, Ohio," *The Achievement of Sherwood Anderson*, ed. Ray Lewis White, (The University of North Carolina Press, 1966), P. 67.
- (2) Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio* (New York: The Viking Press, 1969), P. 25.
- (3) Irving Howe, *Sherwood Anderson* (Stanford California, Stanford University Press, 1966), P. 100.
- (4) Ibid., P. 107.
- (5) Malcolm Cowley, "Introduction," *Winesburg, Ohio*, P. 14.
- (6) *Winesburg, Ohio*, P. 24.
- (7) Lionel Trilling, "Sherwood Anderson," *The Achievement of Sherwood Anderson*, P. 216.

- (8) Loc. cit.
- (9) *Winesburg, Ohio*, P. 94.
- (10) Ibid., P. 162.
- (11) Ibid., P. 155.
- (12) Ibid., P. 124.
- (13) Ibid., P. 243.
- (14) Ibid., P. 169.
- (15) Ibid., P. 119.
- (16) Ibid., P. 120.
- (17) Ibid., P. 199.
- (18) Ibid., P. 35.
- (19) Ibid., P. 121.
- (20) Ibid., P. 121.
- (21) Ibid., P. 125.
- (22) Ibid., P. 36.